

富永神社祭礼奉納

とき 平成十九年十月五日(金)
午後四時四十五分始
ところ 富永神社 能楽殿

能組

仕舞

経経経

政政政

クセ キリ クセ

加藤 晃
今泉 尚美
村田 昂平

狂言

舎

弟

弟

天野 遼星

兄弟 熊谷 慧士 隆
教手 加藤 賢一
後見 酒井 宏

仕舞

羽生

殺生 衣

クセ

島 尚太郎
平野 瑞季

小舞

鶉

飼

大原 正巳

天野 雅夫
水谷 至男
地謡 山本 勝

狂言

蝸

牛

山伏

小澤 貞博

太郎冠者 酒井 淑規
主人 加藤 賢一
後見 酒井 宏

仕舞

高

砂

伊藤 杉人

仕舞

花卷 田

月絹 村

キリ クセ キリ

谷野 允千帆
本田 洋子
岩崎 葉子

(休憩 三十分)

狂言

瓜盗人

盗人 天野 雅夫

百姓 山本 勝
後見 大原 正巳
笛 酒井 淑規

5:00分頃

5:45分頃

7:00分頃

7:25分頃

能

羽

シテ 杉浦史佳

衣

ワキ 中嶋康夫

小鼓 大鼓 河村

総一郎 大鼓 森田 今泉英三

8:10分頃

狂言

六地蔵

スツバ 田舎者 佐野泰三

立衆 清川松一 〃 山口俊男 〃 小林常男 後見 大原正巳

後見 太田康弘 地謡

太田研司 清水利高 牧野修 高林牛口 竹内三郎 伊藤杉人 竹内三郎

8:40分頃

能

猩

シテ 長田共永

々

ワキ 櫻本泰朗

大鼓 小鼓 清水岡

利高 大鼓 今泉英三 アイ子 苗 今泉英三

後見 太田康弘

地謡

伊藤修 鈴木崇史 牧野修 高林牛口 竹内三郎 太田研司 竹内三郎

(終了予定九時十分頃)

主催 本町区

あ
ら
す
じ

狂言
舎弟しゃてい

親から貰った名前があるのに、兄からいつも舎弟と呼ばれていた弟、ふと舎弟と言ふことばの意味に不審を抱き早速ものりしの某に尋ねます。某はいたづら心で舎弟とは盗人の事だと教えます。そこで腹を立てた弟が兄の処へまいりまして……

狂言
蝸牛かぎゅう

羽黒山の山伏が大峰・葛城での修行を終えて帰国の途中、藪の中で寝ていると、主に蝸牛（かたつむり）を取ってこいと命じられた太郎冠者に蝸牛と間違えらえる。山伏は蝸牛になりすまし、その特徴（頭、貝、角等）も示してみせる。主人のところへ同道しようという太郎冠者に囃子物を教え、二人で囃して浮かれる。迎えに来た主人は驚き、蝸牛ではないと注意するが……

狂言
瓜盗人うりぬすびと

畑の瓜が盗まれるので、畑主が案山子（かかし）を作っておくと、やってきた盗人は人と思って驚くが、案山子と知ると怒って壊し、畑を荒らして去る。翌日、今度は畑主が案山子に化けて待つっていると、盗人はまんまとひっかかり……

能
羽衣はごろも

三保の松原ののどかな春の朝、漁師の白竜が浜辺に出て見ると、近くの松の枝に見馴れぬ衣が掛かっている。珍しく思い家宝にしようと持ち帰ろうとします。

その時どこからともなく美しい乙女が現われて、それは天人の羽衣といって人間に与えるものではないから返して欲しいと頼みます。白竜はそれを聞いて返すどころか国の宝にするのだと断ります。天人は羽衣がなければ天に帰ることが出来ないので嘆き悲しみます。さすがの白竜も憐れみ羽衣を返す代わりに天人の舞樂を奏して欲しいと条件を出しますが、ただ返してしまえば舞を舞わずに空にかげ昇るのではないかと、不信の念を洩らすと「いや疑いは人間にあり、天に偽りなきものを」と天人にいわれ今更のように心の醜さを恥じます。

天人は羽衣を身につけて、天上の月宮殿の有様をうたい三保の松原の景色をたたえ、君が代の万代を寿いだりしながらこの世ならぬ舞を舞いつづけ、やがて羽衣の裳裾をなびかせながら霞にまぎれて天に昇ってしまいます。

あとは、おだやかな波が岸に打ち寄せているばかりでした。

狂言 六地藏

今生後生のため六地藏堂を作りました。そこで安置する地藏を仏師に頼もうと田舎者は、都へ上ります。都に着いたが、仏師の居所を知らない。そこで大声をあげて仏師を尋ねます。これを聞いた都のスツパ（詐欺師）が親切に声をかけ、事情を聞き、自分こそが真仏師であると名乗り、明日の今時分迄に六地藏を作つてやろうと約束します。仲間三人とかたらい、三人づつ二度に分けて地藏に化けて田舎者をだますことにする。そこで……

能

猩しよお 々じよお

中国のカネキンザンの麓に、高風こうふうという大そう親孝行で評判の高い男がいました。彼はある夜不思議な夢を見ました。それは揚子の市に出て酒を売ると、富貴の身になるといのです。その夢のお告げの通りすると、なるほど次第に金持となりました。ところで、市のたつごと高風の店へ来て酒を飲む者がいます。その男はいくら飲んでも顔色が一向に変らないので、ある日その名を尋ねると、海中に住む猩々だとあかして帰って行きました。そこで高風は、ある月の美しい晩、今度は潯陽しんやうの江のほとりに出、酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。（ここまでの経過をワキ高風が一人で語り、能はここから始まります）やがて猩々は、葉の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をした、良き友と会う事を樂しみに、波間から浮かび出て、高風と酒をくみかわします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音をかなで、波の音は鼓の調べのようにひびきます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして、高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えてゆきます。